

## あたりまえの反対

みなさん、「あたりまえ」の反対語とは何だと思いますか。「偶然」「滅多にない」などさまざまな答えが思いつくのではないのでしょうか。私が思う「あたりまえ」の反対は、「ありがとう」です。これから、私がそう考えるに至った理由を、これまでの経験を元に述べていきたいと思います。

私は七歳からバスケットボールを続けてきました。今年の六月、中学校生活最後のバスケットボール大会で、私たちのチームは試合に負けてしまいました。部活を引退することが決まった瞬間でした。悔し涙が止まらないなか、チームのメンバー全員で、保護者の方がいる応援席に向かい、一礼しました。

このとき、私の中で「毎日体育館へ送迎してくれてありがとう。」「遠征に連れて行ってくれてありがとう。」「毎日、練習着を洗ってくれてありがとう。」と、今まで「あたりまえ」のように感じていたことへの感謝の気持ちが、どんどん込み上げてきました。こんなにも、私たちを応援してくれる人がいたことは「あたりまえ」ではなく、「ありがたい」ことだったと気づかされたのです。家族という身近な存在がいたからこそ、大好きなバスケットボールと向き合うことができたのだと思います。

一礼を終えたあと、チームメンバーと集まり抱き合ったとき、キャプテンから言われた「ありがとう」という言葉が私は忘れられません。こんなにも心強く、頼もしいチームメイトに恵まれたのも、信頼できる指導者の方がいてくれたことも、全部あたりまえじゃない。本当に感謝しなければいけない。自分がバスケットボールを続けてこられたのは、「あたりまえ」じゃない。感謝の気持ちを忘れてはいけないと気づかされた瞬間でした。

もう一つ、「あたりまえ」なんかないと感じた日があります。それは、二〇二四年元日に起きた能登半島沖地震です。あの日の佐渡は凜とした空気と温かい陽光に包まれていました。新しい年をあたたかい気持ちで迎えた日の午後、あの大地震が起こるなんて、誰が想像できたでしょう。突然の緊急地震速報。異常を知らせるあの音を聞き、私たち家族は、急いで避難しました。幸い、被害は少なかったものの、帰宅してテレビをつけると、恐ろしい現実を目の当たりにしました。ごく普通にあったはずの日常が、一瞬でなくなってしまう。日々、何事もなく過ごせていることが「あたりまえ」ではなく「ありがたい」ことなんだと強く実感した日でした。

朝起きて、ごはんがあって、学校に行って、好きなことをして、お風呂に入って、寝ること。それは決して「あたりまえ」ではないのです。

私は、「あたりまえ」の反対は「ありがとう」だと思います。この主張を通して伝えたいことは、まわりの環境を「あたりまえ」だと思わず、日々の小さな「ありがとう」に気付いていこう、ということです。先ほどのように、身近な環境のなかにも、ありがたさを感じられる場面はたくさんあります。でも、私たちがそのありがたさに気付いていないのは、この環境が「あたりまえ」だと感じてしまっているからではないのでしょうか。身近なものほど、ありがたさに気付くのは難しいです。ですが、まずはそのありがたさに気付こうとする気持ちが大切だと思うのです。私も、その気持ちを忘れずに、過ごしていきたいです。そして、たくさん「ありがとう」といえる人になりたいです。

中学生・高校生は思春期真っ只中。「ありがとう」と面と向かって言葉にすることは恥ずかしいと思うかもしれません。ですが、「ありがとう」と伝えられず、後悔はしたくありません。だから、「ありがとう」はためらわず、素直に口にしたいです。「ありがとう」と言うことは恥ずかしいことではないと思ってほしいのです。こうして、この世の中が「ありがとう」という感謝の気持ちで溢れる、明るい社会になってほしいと思っています。